

Market Flash

2017年 Top Risks

2017.01



日本アルプス電子株式会社
NIHON ALPS ELECTRONICS CO.,LTD.



Market Flash



今年は丁酉。株式相場の格言では申酉「騒ぐ」の2年目です。

昨年1年目は、英国のEU離脱やトランプ氏の米国大統領選勝利など予想もしなかったことが現実となり、文字通り騒がしい年となりました。

2年目となる今年もそれを引き継ぎ大変騒がしい年になりそうです。ただし、それがいい方向へ向かうのか悪い方向へ向かうのかは本当にわかりません。

一番のリスクとみられるトランプ大統領の就任については、現在のところ株式市場にはいい方向に向かっていますが、とにかくその言動が予想できないため、就任してからの実際の行動を見ないとその行方はわかりません。

一方で、AIなど産業技術の大変革の年にもなりそうです。

いろいろな意味で変革が起こりそうな1年ですが、そんな時こそしっかりと地に足をつけて、惑わされることなく歩んでいきたいものです。

本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

干支で占う2017年(平成29年) 酉年(とり年)

2017年は**丁酉(ひのととり)**

「**丁酉**」は、「干支」の組み合わせの第34番目で、陰陽五行では、十干の「**丁**」は陰の「**火**」、十二支の「**酉**」は、陰の「**金**」である。

還暦を迎えるのは1957年(昭和32年)生まれの人。申年の年男・年女は、1933年(昭和8年)、1945年(昭和20年)、1957年(昭和32年)、1969年(昭和44年)、19801年(昭和56年)、1993年(平成5年)、2005年(平成17年)生まれの皆さんです。

「**丁**」は十干の4番目の干で、丁の字は、釘から来ており、「**安定する**」という意味がある。

また酉年の「**酉**」は、「**酒**」に関する時に用いられ、収穫した作物から酒を作る、また収穫できる状態である、という意味から「**実る**」という意味もある。

丁の「**安定する**」、酉の「**実る**」という意味が合わさると、とてもいい年になりそうだが、丁(火)と酉(金)は**陰陽五行説では相剋の関係になる**。

相剋とは？

- 1 対立・矛盾する二つのものが互いに相手に勝とうと争うこと。「**理性と感情が一する**」
- 2 五行(ごぎょう)説で、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木にそれぞれ剋(か)つとされること。五行相剋。

火が金を溶かすことになり、あまり順調でないことを意味する。上の丁が下の酉を剋する、上に対して下が弱いという関係を表す。

このように見ても2017年は何か波乱の年になりそうである。



酉の雑学

<酉年生まれの特徴>

洞察力があり、多くの才能に恵まれている。頭の回転が速く、几帳面で集中力や持続力があり凝り性な反面、こだわりが強いので理想やプライドが高く、妥協が苦手だといわれている。

<酉という字の成立ち>

酉の字は酒を醸す器の象形文字で、「酒」のもとの字です。収穫した作物から酒を抽出する、収穫できる状態である、成熟した状態などを表すため、「成る」「実る」「成熟」の意味があります。こうしたことから酉を用いた字には、酒、酢、酸、酩酊、発酵、醤油などがある。

<文化的特徴>

十二支の「酉」は、動物で表すと「鳥」ではなく「鶏」なので、ニワトリのことを指します。ニワトリは、弥生時代に中国大陸から伝来したといわれていますが、採卵や食用というよりも、鳴き声で朝を告げる「時告げ鳥」としての利用が主だったと考えられています。夜明け方、丑の刻(午前2時頃)に鳴くのを「一番鶏」、寅の刻(午前4時頃)に鳴くのを「二番鶏」といいます。また、元旦の鶏の第一声を「初鶏」といい、新春の季語になっています。

日本の文献で最初に鶏が登場するのは『古事記』で、天照大神(天照大御神)が天の岩屋戸に隠れてしまい世界がことごとく闇になったとき、八百万神が常世長鳴鳥(とこよのながなきどり)を鳴かせて、天照大神を呼び出す話があります。この「常世長鳴鳥」が鶏=ニワトリです。鶏はまさに天照大神や太陽を迎えるもので、神聖なものとされていました。現在でも、神宮(伊勢神宮)の鶏は神鶏と呼ばれ、式年遷宮の際、「鶏鳴三声(けいめいさんせい)」という遷宮を象徴する儀式があります。また、鶏のいる神社も多くみられます。

やがて、奈良・平安のころに闘鶏が行われるようになり、江戸時代には採卵、食用されるようになって身近な生き物となりました。ニワトリの語源は、庭のトリだといわれています。こうした経緯もあり、鶏は日本画にも多く登場しています。あの伊藤若冲も好んで鶏を描いていますね。

ニワトリの鳴き声

日本語では「コケッコー」と表現しますが、他国では違うのでいくつか紹介します。音をカタカナ表記にするとこのような感じです。

【日本語】 コケッコー

【英語】 クックドゥードゥルドゥー

【フランス語】 コッコリコー

【スペイン語】 キキリキ

【ドイツ語】 キツケリキー

【イタリア語】 キッキリキー

【中国語】 コーコーケー

【韓国】 コッキオ



酉の雑学

< 鶏にまつわることわざ、慣用句 >

● 鶏群の一鶴(けいぐんのいっかく) / 群鶏の一鶴 / 鶏群の孤鶴 / 野鶴の鶏群に在るが如し
多くの凡人の中に一人だけ抜きん出て優秀な人がまじっていることのたとえ。

● 鶏口牛後(けいこうぎゅうご) / 鶏口となるも牛後となるなかれ

大きな集団や組織の末端にいるよりも、小さな集団や組織の長として活躍するほうがよいということ。鶏口とは鶏のくちばしのことで、小さなものの頭のたとえ。牛後とは牛の尻のことで、大きなものの末端のたとえ。

● 鶏を割くに焉んぞ牛刀を用いん(にわとりをさくにいづくんぞぎゅうとうをもちいん)

小さなことを処理するために、大物を用いたり大げさな手段を取る必要はないということのたとえ。また、適用の仕方が正しくないことのたとえ。

● 甕裡醃鶏(おうりけいけい)

見識が狭く世間知らずな者のたとえ。甕裡は甕(かめ)の中のこと、醃鶏は酒つぼなどに湧く小さな虫のことで、甕の中に湧く小さな虫の意から、世の中を知らない小人物のたとえになった。

● 嫁鶏随鶏(かけいずいけい)

妻が夫に従うことのたとえ。嫁鶏は嫁いだ雌鶏のことで、雌鶏が雄鶏に従うの意から、妻が夫に従うことのたとえになった。

● 家鶏野雉(かけいやち) / 家鶏をいとい野雉を愛す

平凡で古いものを嫌い、珍しく新しいものを好むことのたとえ。また、家にあるものより外にあるものを好むこと。家で飼っている鶏を嫌い、野性の雉(きじ)を好むという意から。



酉年の主な出来事

過去の酉年を振り返ってみると、政変の起こる年、ということができる。

12年前、小泉純一郎首相が郵政民営化を掲げて衆議院を解散し、自民が大勝した。

24年前、宮沢内閣への不信任案が可決され、総選挙の結果自民が過半数割れで野党になった。細川内閣誕生。

48年前、佐藤栄作首相が沖縄返還で米国と合意し、解散・総選挙に打って出た。

今年も安倍首相が解散・総選挙に打って出るのではないかと騒がれている。

○戦後の「申年」の出来事

2005年	郵政解散に伴う第44回衆議院総選挙が行われる。結果は 自民党が296議席を獲得し、結党50年目にして最大の歴史的圧勝となる。
	愛知で愛・地球博が開幕／プロ野球でセ・パ交流戦開始／JR福知山線脱線事故／ケールビズ開始／電車男ベストセラー／人口減少社会が始まる／ドラえもん声優が一斉交代
1993年	細川内閣が発足。55年体制崩壊。
	皇太子・雅子さま御結婚／サッカーJリーグ開幕／ロスタイムの失点でW杯出場を逃す(ドーハの悲劇)／新幹線「のぞみ」が山陽新幹線で運行開始／福岡ドームが完成／日本一の高さを誇る超高層ビル、横浜ランドマークタワーが開業／レインボーブリッジが開通／法隆寺・姫路城・屋久島・白神山地が日本での初の世界遺産登録／冷夏、豪雨など列島に異常気象／曙が外国人力士として初めて横綱に昇進
1981年	鈴木善幸改造内閣発足
	千葉県船橋市に大型ショッピングセンターららぽーとオープン／スペースシャトル コロンビアが打ち上げ成功／台風15号関東直撃／1月から3月まで記録的な豪雪／神戸市でポートピア'81が開幕／常用漢字が定められる／貸しレコード店大流行スペースシャトル「コロンビア」打ち上げ／ファミリーマート開業
1969年	佐藤首相訪米。沖縄の施政権を1972年中に返還することが決定。 衆議院総選挙。自由民主党288議席、日本社会党90議席、公明党47議席、民社党31議席、日本共産党14議席、無所属16議席(そのうち自民党は保守系無所属12名を追加公認し、300議席となった)。小沢一郎を始めとする四十四年組が初当選。
	東名高速道路全通／日本初のホームセンター1号店／テレビアニメ『サザエさん』放送開始／人類初の月面着陸／日本銀行が五百円札を発行／日本で初めて現金自動支払機を設置／東京・池袋に「パルコ」開店／東京・世田谷に玉川高島屋開店
1957年	第1次岸内閣成立
	ドライブ・クラブが全国で400社を超えドライブブームが高まる／サイクリングブーム／五千円紙幣(聖徳太子の肖像)、百円硬貨発行発行／大阪のそごうが東京・有楽町に進出／ダイエーの一号店「主婦の店ダイエー」が開店／ホッピングが大流行国産ロケット1号機「カッパー4C型」の打ち上げ成功／日本コカ・コーラ設立／諫早豪雨(死者856名)



「酉年」の株式市場

「辰巳(たつみ)天井、午(うま)尻下がりに、未(ひつじ)は辛抱、申酉(さるとり)騒ぐ、戌(いぬ)笑い、亥(い)固まる、子(ね)は繁盛、丑(うし)つまずき、寅(とら)千里を走り、卯(う)跳ねる」といわれる。

まず、干支別の日経平均を調べると、酉年は買いの好機であった。年間を通じてプラスで終えた年を「勝ち」とすると、過去5回の戦績は**4勝1敗**。1969年から4回連続で上昇しており、4連勝中の干支は酉年だけである。

過去の酉年を振り返ると、

前回2005年は小泉内閣でいわゆる「郵政解散」があった年で年中盤から大幅高。政府・日銀の「景気踊り場脱却」宣言も材料視されました。

93年はバブル崩壊からのリバウンド相場、

81年は米でレーガン大統領が誕生、レーガノミクスという経済政策が注目されました。

69年は外国人投資家の買いが相場をけん引。それまで投資基準だった配当利回りに代わり、PER(株価収益率)が注目されるようになった。

57年はなべ底不況で、酉年唯一の下落局面だった。

バブル崩壊からのリバウンド＝デフレ脱却、レーガン大統領＝トランプ新大統領(トランプノミクス)、外国人買い期待など、共通点を見出すことができる。

一方で、十干でみてみると逆の結果となっている。

丁の年は株式市場にとって鬼門。市場関係者調べ(以下同)では、東証の再開後のパフォーマンスは**1勝5敗**。平均の年間騰落率はマイナス7.7%で、勝率、騰落率ともに最下位。10年に1度なので、丁は末尾に7が付く年ということになる。

過去を振り返ってみると、

1987年はブラックマンデー(世界同時株価崩落)、

1997年はアジア通貨危機(タイの通貨下落が他のアジア地域に波及)、

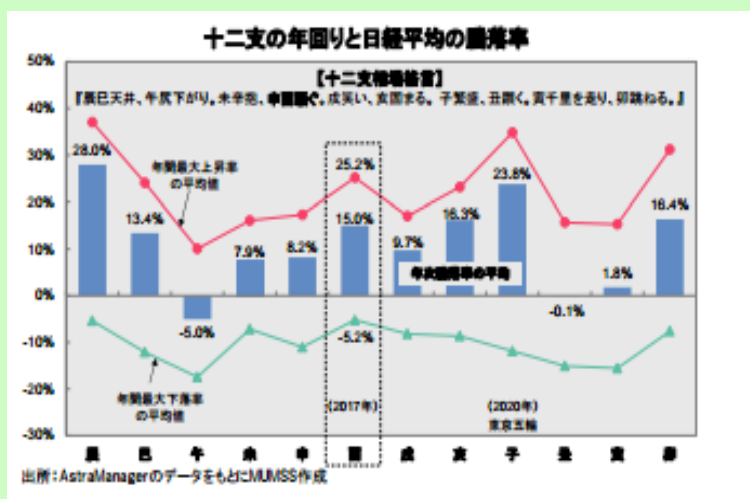
2007年はサブプライムショック(低所得者の住宅ローン焦げ付き危機)と、歴史的に名を残すような下げを記録している。

過去3回はいずれも年後半に波乱となっており、17年も警戒しておくとも良いかもしれない。

ちなみに前回の「丁酉」(ひのと・とり)だった、

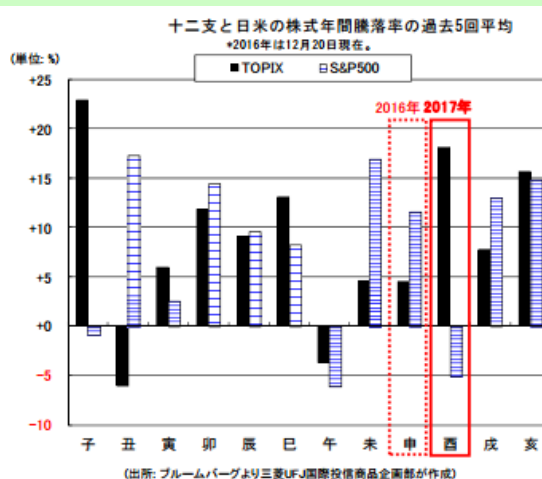
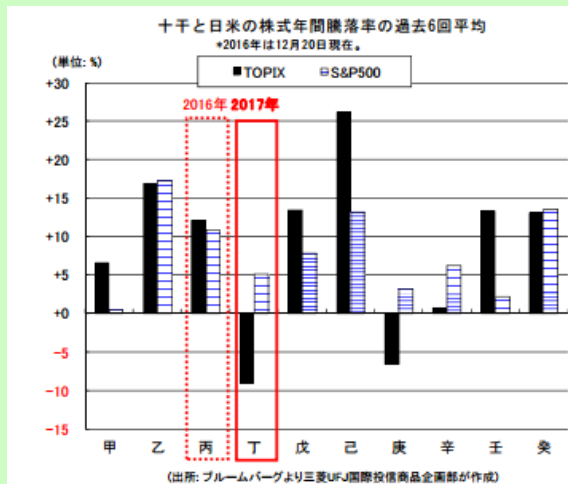
60年前の1957年は年間で約14%の下落。過去、酉年として唯一下げた年ということになっている。

いずれにしても2017年は要注意の年だ！





Market Flash



● 各国選挙・国際会議など主要スケジュール(2016年12月9日時点)

日	程	国・地域	予 定
1月	17-20日	世界	世界経済フォーラム(ダボス会議)
	20日	米国	トランプ米大統領就任
	28日	中国	中国 春節(休日は27日~2月2日)
2月	月内	米国	トランプ米大統領 施政方針演説(一般教書)
	月内	米国	米国 予算教書、大統領経済報告書 発表目処
3月	15日まで	欧州	オランダ総選挙
	16日	米国	米国「連邦債務上限」の適用再開
	17-18日	世界	G20財務相・中央銀行総裁会議(独・バーデン=バーデン)
	月内	中国	中国 全国人民代表大会(全人代)
4月	月末まで	欧州	英国、EU離脱通知と交渉開始見込み
	23日	欧州	フランス大統領選挙(第1回投票) * 第2回投票5月7日
5月	月内	世界	G20財務相・中央銀行総裁会議(ワシントン)
	19日	イラン	イラン大統領選挙 * ロウハニ現大統領、2期目出馬意向
	25日	OPEC	OPEC定例総会(ウィーン)
6月	26-27日	G7	G7先進国首脳会議(伊・シチリア島)
	月内	米国・中国	第9回米中戦略・経済対話(米国)
7月	7-8日	世界	G20首脳会議(独・ハンブルク)
8月	7日	日本	「JPX日経インデックス400」銘柄入替公表
	月内	米国	カンザスシティ連銀経済シンポジウム(ジャクソンホール)
9月	後半	欧州	スペイン・カタルーニャ州、「分離独立」是非で国民投票
秋		欧州	ドイツ総選挙(8/27-10/22の日曜日、9月24日が有力)
		中国	第19期中国共産党大会 * 新指導部人事 5年ごと
10月	1日	中国	中国 国慶節(休日は1-7日)
	月内	世界	G20財務相・中央銀行総裁会議
12月	月内	OPEC	OPEC定例総会(ウィーン)
2018年	2月3日	米国	FRB イエレン議長 任期
	4月8日	日本	日銀 黒田総裁 任期



Market Flash

2017年 Top Risks



アメリカの国際政治学者イアン・ブレマー博士が率いるユーラシア・グループという会社が毎年発表する「Top Risks」という報告書がある。

ブレマー氏が代表を務めるユーラシア・グループは、国際的な政治リスクについて研究するコンサルティング会社で、毎年初めにその年の世界の政治リスクトップ10を予想して発表している。

「Top Risks 2017」も1月5日に発表された。その内容をご紹介します。大きな変動が予想される2017年、常にこれらのリスクを念頭に置いて行動する必要があるであろう。

Top Risks 2017

1. Independent America
2. China Overreacts
3. A Weaker Merkel
4. No Reform
5. Technology and the Middle East
6. Central Banks get Political
7. The White House Versus Silicon Valley
8. Turkey
9. North Korea
10. South Africa

2016年はいろいろな地政学的領域の変更があた年ではないだろうか。それは、ポピュリズムの台頭によるグローバリズムへの拒絶反応である。例えば、英国のEU離脱、トルコでのクーデター失敗、ロシアのシリアへの軍事介入、アメリカのアジアでの軸足の転換(終焉)などである。

しかし、最も驚いたのが、米国の大統領選挙においてトランプ氏が当選したことであろう。彼の発言には排他主義、自国第一優先であり、第二次大戦後70年続いてきた超大国アメリカの存在による世界平和、安全保障、貿易という Pax Americaという体制が崩れようとしている。2017年は地政学的な後退期に入ったといっていだろう。



Market Flash

2017年 Top Risks



1. Independent America

トップリスクはやはりトランプ大統領が誕生するアメリカだ。「Independent」とは、「独立した、自主」という意味であるが、ここではもう少し強い意味で言っているものと思われる。トランプ氏は「America first」と主張し、「make America great again」を誓約している。「independence」これは独立独歩、いい意味よりは、排他主義的な意味も含んでいるものと思われる。

世界的な超大国であったアメリカは、かつては混乱をやわらげ妥協を生み出すような国際的なトランプカードであった。しかし、今は鬼札(wildcard)となっている。なぜなら、そのカードは世界的な安定を強化するために使用されるのではなく、アメリカの権益だけのために使用されるからだ。

トランプは孤立主義ではなく一国主義者である。タカ派であり、先見性がない、特に外交に関しては・・・欧州とアジアはこれに対してヘッジをしてくるであろう。

中国とロシアは試してくるであろう。そして、アメリカの国際機関はその影響力を失っていくであろう。



とにかく、このトランプ氏の行動・言動の真意がわからない。そのために、今後どうなっていくのかも全く予測不可能である。良くも悪くも大きな変革をもたらすことには間違いのないであろう。

2. China Overreacts

2017年は中国にとっても大きな年でもある。秋に開催される第19回全国党大会において、党のトップ人事が行われ入れ替えが行われる。これにより、習近平体制がより強化確立されるとみられる。

この習近平体制の強化によって二つのリスクが浮上する。

第1に、習近平のリーダーシップに注目が集まっている中で、外部からの批判に対して過剰に反応する可能性がある。特に、米国と中国の緊張は高まる可能性が強い。

第2に、党議会の安定性を重視するあまり間違った経済政策を続ける可能性が高い。

中国は最近、特に国内の統制を強化するあまり、経済政策については場当たり的なものが多くなってきている。

不動産バブルや銀行の不良債権などについても、いつかは表面化しより深刻な問題になる可能性が強いと思われる。





Market Flash

2017年 Top Risks



3. A Weaker Merkel

ここ数年にわたりEUで強力なリーダーシップを発揮してきたドイツのメルケル首相がいくつもの政策的・経済的難題に直面している。

難民問題に対する国民の不満や企業危機(ドイツ銀行など)、台頭する右派勢力などである。

2017年の秋の総選挙でメルケル首相がその座から降ろされることはないであろうが、その力は確実に弱まってきている。

もし、フランスの選挙で右派のルペン女史が大統領になり、EU離脱についての国民投票を呼び掛けたとすると、メルケル首相の最大の敵対者となるであろう。

EUでは現在、最も強いリーダーシップが求められている時期にもかかわらず、その強いリーダーの影響力がなくなりつつある。



4. No Reform

多くの国で改革へのリーダーシップが欠如しつつある。ユーラシアグループは、特に次の4つのリスクを挙げている。

- ①インドのナレンドラ・モディ首相やメキシコのエンリケ大統領は、すでに自分の役割を十分やり遂げたと思い込んでいる。
- ②中国、ロシア、フランス、ドイツ、アルゼンチンの政治リーダーたちは、国内の選挙までは何も動こうとはしないだろう。
- ③トルコ、南アフリカ、イタリア、英国はそもそも改革することに興味がない。
- ④サウジアラビア、ナイジェリアは改革をする意欲はあるのだが、多くの障害に阻まれている



5. Technology and the Middle East

ユーラシアグループは、技術革新が中東における政治的安定を脅かしていると指摘している。

産業技術の進歩によるオートメーション化は若い雇用を奪っている。また、テロリストは、コンピューターシステムを弱体化させる技術を身に付け、サイバー攻撃により、国内の混乱をさらにおおっている。

一般国民にはまだまだコンピューター技術などが浸透していない中に、このようなサイバー攻撃によってテロリストを増やしたり、偽情報を流し国内をより混乱させる動きは近年増加しつつある。

そのため、イスラム国などへの直接的軍事攻撃だけではテロ撲滅は難しい情勢である。このような技術確認が中東のさらなる混乱の原因となっているのである。





Market Flash

2017年 Top Risks



6. Central Banks get Political

本来中央銀行は政府の意向とは独立したものであるが、今年はそれがより政府に左右される可能性が高い。まず、米国においては、2018年2月に任期が来るFRBのイエレン議長が退任し、その後任にトランプ大統領の同胞が任命される可能性が高い。そうなれば、より政府に翻弄され、今後数年にわたってFRBの存在は評判を貶めることになるだろう。

英国においてもドイツにおいても中央銀行の低金利政策に対して批判が高まってきている。

この点においては、日本においても同様であり、日本ではすでにかなり政府の意向が反映されて金融政策運営がなされている。ただ、この金融政策頼みの経済対策もすでに限界にきており、今後は政府の実体的な経済政策が期待される。2年前は日米欧とも中央銀行の政策が注目されるという年であったが、今年はその逆で中央銀行の政策ではもう対応しきれなくなった政府がどのような政策を打っていくかが注目されていくであろう。



7. The White House versus Silicon Valley

トランプ大統領とシリコンバレーは、いろいろな意味でけんか腰の状態となるであろう。

第1にメディアである。ねつ造ニュースを流し続けているとトランプ氏はメディアを攻撃し、ツイッターで言いたい放題である。

先日の記者会見においてもCNNの記者とのやり取りは、大統領になる人間とのやり取りとは到底思えない醜い場面であった。

また、トランプ氏はしばしば貿易不均衡により雇用が奪われていると中国、日本、メキシコなどを名指しで非難しているが、いつかは、技術革新によるオートメーション化がより多くの雇用を奪っているという事実気が付くであろう。そうなったとき、彼はシリコンバレーと対峙することになる。



8. Turkey

トルコのエルドアン大統領は、昨年7月の軍事クーデターの失敗以降、非常事態宣言をまだ継続している。クーデターの関与者の逮捕や掃討は、司法、官僚、メディア、さらに一般企業にまで及んでいる。

2017年、彼は自分の正当性を証明するため国民投票を行う可能性が高い。

このような伊国内の混乱の付けが経済の停滞をさらに悪化させ、さらに、EUとの関係も悪化させるであろう。

益々不安定さを増す地域である。





Market Flash

2017年 Top Risks



9. Noeth Korea

ユーラシアグループによると、北朝鮮にとって2017年は最も大きな年となるという。

それはいい意味ではない。

北朝鮮が米国に明らかに緊急の脅威をもたらしているかは正確に把握することは難しいが、太平洋横断ミサイルの開発が最終段階にきていることは確かであろう。

北朝鮮に関連して以下の2つのリスクが考えられる。

- ①トランプ大統領は、北朝鮮に対する強硬派の動きを強め、米中関係の危機を引き起こす。
- ②韓国政権が、北朝鮮との外交に友好的な政権に代わる

この米・中・韓の力関係によって、北朝鮮の動きが変わってくるであろう。トランプ大統領以上に金正恩は予測不可能な存在である。



10. South Africa

南アフリカのズマ大統領は内外で衝突を繰り返した。今でも国内で大統領を退陣させる動きが活発化している。

この南アフリカの混乱は、地域の安全保障のための南アフリカの伝統的な役割を損なうとユーラシアグループは危惧している。



さて、このように見てくると2017年は大きな変化、転換がある年になると予測される。残念ながらそれは悪い意味でのリスクの方が多いように思える。

このような世界情勢の中、日本の外交も非常に難しい判断が迫られる時が来るかもしれない。

それはやはり、下の写真の組み合わせが重要ポイントで、左から優先順位がつけられるであろう。

為替や株式市場も「酉騒ぐ」年になりそうである。

